オムニバス講義のオンデマンド型オンライン授業について

松　井　健　吾*

An Asynchronous Online Omnibus-Style Course

Matsui Kengo

Abstract:
In this paper, we will report a case study of shifting an omnibus-style course, "Introduction to Ibero-American Studies", to asynchronous online lessons. We analyze the results of the class evaluation questionnaire completed by the students, comparing the results to a identical questionnaire conducted previously in face-to-face classes. Our objective is to clarify the advantages and disadvantages of asynchronous online omnibus-style lessons through this analysis.

キーワード：オンデマンド型オンライン授業、オムニバス形式、Google Classroom、授業評価アンケート

1.　はじめに

2020 年度は新型コロナウィルス感染症の影響により、対面授業はオンライン授業への切り替えを余儀なくされた。翌 2021 年度、本学では語学授業を中心に対面での実施となったが、受講者数の多い授業では依然とオンライン形態が続いた。そのような状況下で筆者はいわゆるオムニバス形式の講義科目である「イベロアメリカ研究入門」の科目担当者としての役目を前任者から引き継ぐこととなった。学内では比較的履修者数が多い部類の科目であり、ほぼ毎回担当教員が入れ替わり授業を行うので、リアルタイム型オンライン授業を行うには技術面や通信環境といった側面で不安が大きかった。そこでオンデマンド型授業として開講することにした。本稿ではこうしたオムニバス授業のオンライン化の事例を報告する。さらに、履

＊　神田外語大学　外国語学部イベロアメリカ言語学科　専任講師

修者による授業評価アンケートの結果を過去の対面授業時のものと比較しながら分析し、オムニバス形式の授業をオンデマンドで行うことの利点と欠点について考察する。

2.　科目「イベロアメリカ研究入門」の概要

2012 年、外国語学部の学科改編に伴いイベロアメリカ言語学科が新しく誕生し、その際に「イベロアメリカ研究入門」は新規科目として開講された（青砥、2018: 83-84）。当該学科が必修科目に指定し、学科の専攻言語に関わる地域（スペイン語圏、ポルトガル語圏）について学ぶための入門科目という位置付けである（そのため 1 年次での履修が推奨されている）。同時に外国語学部全体のカリキュラム上では「研究科目（地域・国際研究コース）」の 1 つとして設置されていて、現在では所属学科を問わず 1 年次からの履修が可能である。履修人数については、イベロアメリカ言語学科スペイン語専攻の入学定員が現在の 84 名に増員されて以降、170 名前後で推移している。同ブラジル・ポルトガル語専攻の定員は 44 名、学科全体では 128 名であり、定員より 30 名ほど多く入学してくる年もあったので、そのような時は当学科の 1 年次生だけで 160 名程度となった。なお、2 年次以上で（も）履修する者が若干名いるものの、他学科の学生が 10 ～ 20 名前後いる計算である。

講義はオムニバス形式で進められ、週 1 コマで半期完結（全 15 回）である。例年の開講時期は前期であるが、2020 年度はオンライン化に伴う準備の必要性から後期に開講した。対面授業であった 2019 年度を例に取ると、15 回のうち初回と最終回を同一の教員（コーディネーター）が務め、残り 13 回はイベロアメリカ言語学科に所属する教員が 1 人ずつ、それぞれの専門領域に関連したテーマを扱いながら担当した。年によっては駐日大使などの外部講師を招聘して特別講演会として実施する回もあった。成績評価は授業参加などの平常点と 2 回目以降から課されるリアクションペーパー（全 14 回）による課題点に基づいて行ってきたが、2020 年度からのオンライン授業ではリアクションペーパーのみで評価している。

3. オンライン（オンデマンド型）授業化について

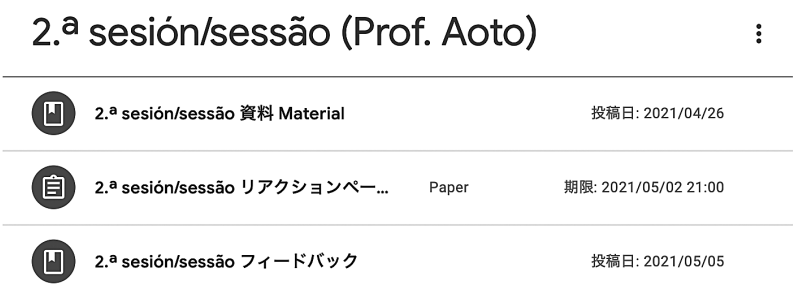
2020 年度より、対面で行っていた初回授業ガイダンス、講義と資料の配布、学生によるリアクションペーパーの作成と提出、成績評価という一連の授業活動はすべて Google Classroom（以下、Classroom）をプラットフォームに用いて行った。次の図 1 は 2021 年度の初回授業ガイダンスの資料として学生向けに配信した授業日程である（ただし、担当教員名は省略して提示する）。

図 1　2021 年度授業日程表（一部）

週	期間	講義回	講義テーマ
1	4/20-25	§1	総論：イベロアメリカ研究入門について
2	4/26-5/2	§2	イベロアメリカの言語：スペイン語の歴史と言語的特徴
3	5/3-9	§3	イベロアメリカの言語：ポルトガル語の歴史と言語的特徴
4	5/10-16	§4	イベリア半島の歴史
5	5/17-23	§5	スペインの言語と文化
6	5/24-30	§6	スペインの文学と文化
7	5/31-6/6	§7	スペインの社会と生活習慣
8	6/7-13	§8	ラテンアメリカの歴史・社会・文化
9	6/14-20	§9	ラテンアメリカの政治・経済
10	6/21-27	§10	ラテンアメリカの貧困と開発
11	6/28-7/4	§11	ラテンアメリカと日系社会
12	7/5-11	§12	メキシコの社会と文化
13	7/12-18	§13	ブラジルの民族と社会
14	7/19-25	§14	日本とラテンアメリカ：在日南米系移民を事例として
15	7/26-8/1	【自律学習】	

（講義資料より）

図 2　第 2 回講義のセクション部分



（Classroom より）

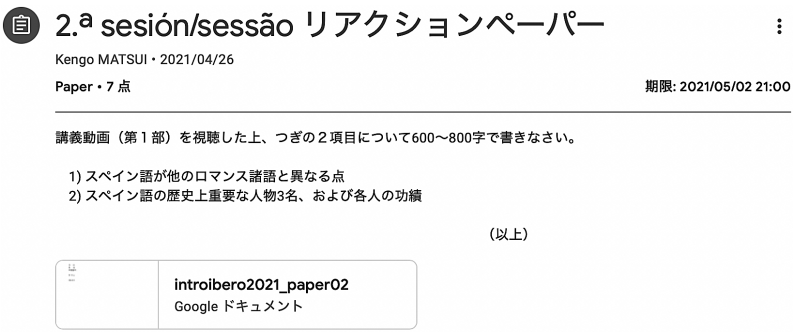
全 15 回のうち、 初回と最終回をコーディネーターである筆者（以下、コーディネーター）が担当し、その他は毎回異なる教員が担当した。2020 年度は「§5 スペインの言語と文化」の代わりに、最終回と同じく「自律学習」（後述、当該年度では「発展学習」と呼んだ）を中間の回に取り入れたシラバスではあったが、その点以外は 2021 年度と同じテーマと担当教員で実施している。以後、とくに断りがない限り本節では 2021 年度の授業について述べる。

例として図 2 には第 2 回目の講義用に Classroom に用意されたセクション（Classroom では「トピック」）を示す。各セクションは基本的に「資料」「リアクションペーパー」「フィードバック」から構成されている。

学生側のオンデマンド授業の流れは基本的に対面授業の場合と同じで、「資料」にアップロードされた資料を使って講義を受講し、「リアクションペーパー」から出題される設問に対してリアクションペーパーを作成し提出する、というシンプルなものである。「資料」は各期間の月曜日 9:00 に投稿されるように設定した。「リアクションペーパー」にはコーディネーターが Google ドキュメントで用意した統一フォーマットを添付しておき（図 3 参照）、600 ～ 800 字程度を分量の目安とした。提出期限については、2020 年度は各週の金曜日 23:59 までとしたが、2021 年度では授業評価アンケートでの意見を踏まえて翌週の日曜日 21:00 までに変更した。

講義担当者にはまず講義資料とその他の補足資料を Classroom 上にアッ

図 3　第 2 回講義の「リアクションペーパー」画面



（Classroom より）

図 4　第 3 回講義のセクション部分と「資料」画面

（Classroom より）

プロードしてもらった（図 4 参照）。講義資料の形式については各担当教員に一任したが、 結果的に大半の講義で動画ファイルが用意された。PDF ファイルを用意する講義は 2 回あった。動画は概ね合計 30 分、長くても 1 時間以内に留めてもらうよう依頼した。次に、「リアクションペーパー」の所定欄に出題内容を記入すること（前掲の図 3 参照）、 提出されたリアクションペーパーを評価することをお願いした。「フィードバック」 への投稿やその実施時期は講義担当者にかかる作業負担を考えて任意としたが、最終的には 8 回の講義でなんらかのフィードバックが行われた。

コーディネーターは Classroom 全体の管理や各講義セクションの用意を行い、 必要に応じて各講義のサポートや学生からの問い合わせ対応に当たった。また、最終回の自律学習について補足しておくと、ここでは授業内容を振り返りつつ発展的な小レポートを作成してもらうことを予定していた[1)]。 しかし、 4 月半ばに大学の海外留学を担当する部署から連絡があり、在リオデジャネイロ総領事館副領事による講話の機会を得ることができたので、学期途中ではあるが最終回を特別講演会として実施することにした。対面授業であれば地理的問題からまず叶わなかったことであり、オンラインでもリアルタイム型では時差の関係から実現が難しかったが、オンデマンド型授業の利点が活かされる形となった。

4.　授業評価アンケートの結果と分析

本節では 2020-2021 年度に実施したオンデマンド授業と 2018-2019 年度に実施した対面授業での学生による授業評価アンケートの結果を比較する。アンケートは大学全体で毎学期末に行われているものであり、データとしては 2015 年度以降のものが入手できたが、 2018 年度以降に質問項目数が増えたという経緯がある[2)]。よって今回は 2017 年度以前のアンケート結果は考察の対象外とした。

手始めに、本科目における各年度のアンケート回答数を示すと表 1 のようになる。

表 1　アンケート回答数

授業形態	年度	履修登録者数	回答数（回答率）
オンライン	2021	173	110（65.9％）
	2020	163	149（84.2％）
対面	2019	177	122（74.8％）
	2018	167	87（50.3％）

（大学からのデータを元に筆者作成）

アンケートは全部で問 1 から 12 の質問項目（多肢選択法）と最後に問 13 として自由にコメントを記入できる自由記述欄（任意回答）から成るが、このうち履修理由を把握するための問 1 と授業の進行度を把握する問 8 を除く 10 項目において両者の間に多かれ少なかれ傾向の違いが観察された。そこで、まずは 4 つの選択肢から回答する形式となっている問 2 から問 10 まで（ただし問 8 以外）の質問項目を次の表 2 のように大きく 3 つのカテゴリに分けた。

表 2　アンケート項目の分類（問 2 ～問 10）

カテゴリ	問	設問内容
学生の学習状況と学習意欲	2	授業時間内および（予習や課題など）授業時間外であなたが費やした学習量はどうでしたか？
	9	あなたはこの授業で扱われた内容について興味・関心が深まりましたか？
	10	この科目の履修を終えた今のあなたにとって、最もあてはまるのはどれですか？
教員の授業運営スキル	3	教員の説明は丁寧でしたか？
	4	教員は授業の内外で学生に質問ができる機会を与えましたか？
	6	教員は授業方法に対して十分な工夫をしていたと思いますか？
授業内容	5	教科書、参考書、配布資料などの教材は、授業内容の理解に役立ちましたか？
	7	この授業の難易度・レベルは、あなたにとってどうでしたか？

（大学からのデータを元に筆者作成）

ここで気をつけたいのは、左記の 9 項目は 4 件法ではあるものの、すべての質問項目が同じ段階的評価を用いているわけではないということである。具体的には、問 2 は「かなり多かった、やや多かった、やや少なかった、かなり少なかった」、問 7 は「難しすぎた、やや難しかった、ちょうどよかった、易しかった」、問 10 は「同じテーマでさらに高いテーマの授業を受けてみたい、同じ教員の関連ある別の授業を受講してみたい、この授業だけで概ね満足している、その他（自由記述欄）」という選択肢になっている。それ以外の設問は「そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない」という同一の選択肢である。

次に、問 11 と問 12 はそれぞれ授業の良い点と改善点について回答させる設問で、これらの質問項目に対しては（1）予習・課題、（2）授業説明・授業方法、（3）教科書・参考書・配付資料、（4）授業の難易度・レベル、（5）授業の進行度、（6）特にない、のうち最も該当する項目を 1 つだけ選択させ、その後に任意でコメントを自由記述させる形式となっている。それぞれの回答について、全体に占める割合を図 5 と図 6 に示す。

押し並べて言えることは、問 11 の「授業の良かった点」（図 5）に関しては 2021 年度以外で 7 割前後の回答が「（2）授業説明・授業方法」をはじめ何かしらの点を積極的に肯定評価していて、問 12 の「授業の改善点」（図 6）に関してはどの年度についても何かしらの改善点があると否定評価しているのは 1 ～ 2 割程度にとどまり、大部分の回答が「特にない」と回答している（注 3 参照）、ということである。この結果から、対面でもオンラインでも授業は概ね肯定的に評価されている、換言すれば両授業形態の間に全体的な「満足度」の差はないと言えるだろう。まずこの点は強調しておきたい。なお、問 11 の自由記述回答を見ると、対面授業ではオムニバス形式という点（様々な教員による様々なテーマの講義を受けられること）にコメントが集中するいっぽう、オンデマンド授業ではそれに加えてオンデマンド型という点（自分のペースで学習できること）を評価するコメントが同程度あった。特異な点としては、2021 年度において最も良かった項目に「（6）特にない」を挙げる学生の割合が「（2）授業説明・授業方法」よりも 10 ポイント近く上回っていて（6：40％＝ 44 件、2：32.7％＝ 36 件）、

図 5　問 11.　授業の良かった点（最も良かった項目を 1 つ選択）

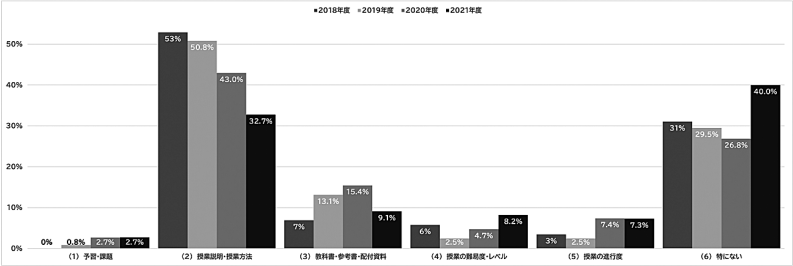
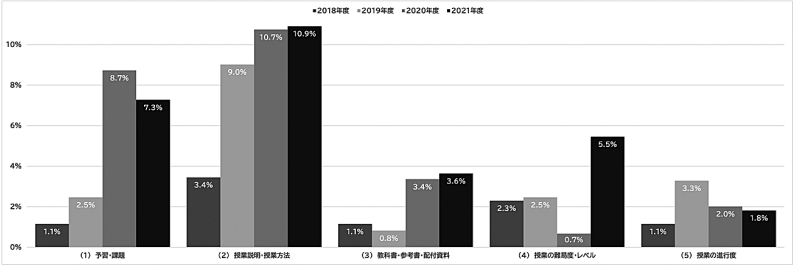


図 6　問 12.　授業の改善点（最も改善してほしい項目を 1 つ選択）[3)]



他の年度とは傾向が逆転していることが挙げられるだろう。しかし、問 13 の自由記述回答も含めて、今回のアンケート結果からはその要因を読み解くことはできなかった。「授業の（最も）良かった点が特にない」という回答の意味するところを分析するためには、質問項目をもっと工夫するなどアンケート自体の設計を見直すか別途の調査が必要である。

ここからは上掲の表 2 に示したカテゴリごとに、その回答傾向の違いについて考察していく。

4.1.　学生の学習状況と学習意欲

まずは「学生の学習状況と学習意欲」に関する項目として問 2、問 9、問 10 をまとめた。その回答結果をパーセンテージで示したのが図 7 ～図 9 である。

図 7　問 2.　授業時間内外の学習量はどうだったか

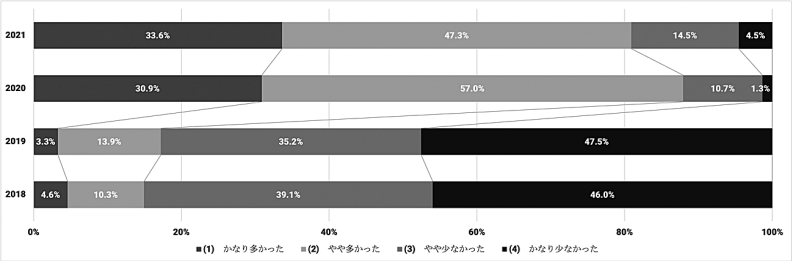


図 8　問 9.　興味・関心は深まったか

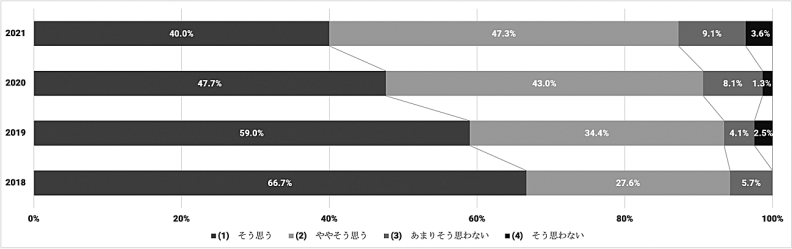
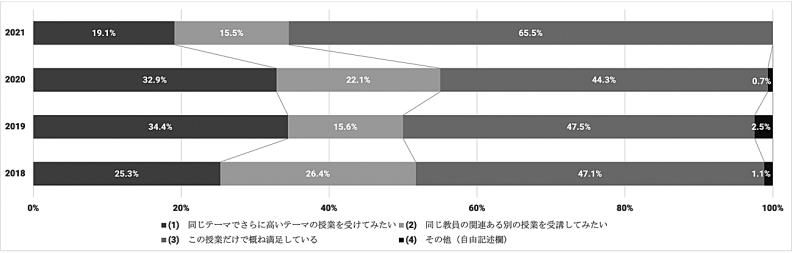


図 9　問 10.　さらなる学習意欲はあるか



問 2 の結果から、2020 年度と 2021 年度ではともに学習量が多かったと回答する割合が前 2 年度と比べて圧倒的に多いことがわかる（図 7）。オンライン授業では授業外の課題が多いと感じたり実際に学習時間が増えたりする傾向にあることが報告されていて（植村ほか、2020；山本ほか、2021；大久保、2021）、本科目についても同様のことがうかがえる（ただし、本アンケートでは授業内の学習量も含まれていることに注意）[4]。今回のオンデマンド授業ではこうした予習や課題の問題を 1 番の改善点に挙げる学生も少なからずいたが（図 6 参照、2020 年度：8.7％＝ 13 件、2021 年度：7.3％＝ 8 件）、自由記述回答（2020 年度 6 件、2021 年度 3 件）に挙げられた要望のうち問 2 に言及している記述は、課題であるリアクションペーパーの程度（分量あるいは回数）を減らすことか提出期限の延長に終始していた。

問 9 に対しては対面でもオンデマンドでも「そう思う」「ややそう思う」の回答が 9 割前後に達しており、概ね同じように肯定的に評価されたと言えるだろう（図 8）。いっぽう、問 10 では同じオンデマンド授業でも 2020 年度は前年度までとあまり変わらない結果になったのに対し、2021 年度では「(3) この授業だけで概ね満足している」の回答が増えて（65.5％＝ 72 件）、「(1) 同じテーマでさらに高いテーマの授業を受けてみたい」「(2) 同じ教員の関連ある別の授業を受講してみたい」といった、いわば学生にさらなる学習意欲があることを示す回答が減ってしまっている（図 9 参照、それぞれ 19.1％＝ 21 件、15.5％＝ 17 件）。両年度の間で異なっていた要素は履修学生と自律学習（発展学習）の回数のみで、これらが変化要因になっているとは断定できない。また別の要因として、学習量（図 7）あるいは難易度・レベルに比例している可能性、つまり、対面授業時と比較して学習量が増えるとともに難易度も上がったので「この授業だけで概ね満足」してしまうという可能性も考えられるが（§4.3、図 14 参照）、これらの項目についてはオンデマンド授業の 2 年間であまり差が見られないため、2021 年度に特有の要因があると考えられる。この点を明らかにするには更なる調査を要する。

以上、問 9 と問 10 への回答結果からは、オンデマンド型授業でもこの科目が目的として掲げる地域研究への導入としての役割はある程度果たして

いると評価できる。しかしながら、対面授業と比較して「興味・関心が深まった」と強く肯定する割合が減少していること、さらに 2021 年度では関連する授業やよりレベルの高い授業を履修したいと思う割合が減少していることを考慮すると、興味・関心の深まりが学習の継続・発展につながるという側面ではいささか不十分なところがある感は否めない。憶測の域を出ないが、学習意欲を促す要因に教員の表現力（学生を強烈に惹きつけ興味を掻き立てるもの）があるとすれば、オンデマンドではそれが十分に発揮されない、あるいは伝わらないという可能性があるのかもしれない。こうした要素は次節で扱う教員の授業運営スキルにも関係してくる話である。

4.2.　教員の授業運営スキル

次に、問 3、問 4、問 6 を「教員の授業運営スキル」に関連するものとして 1 つのカテゴリにまとめた。その回答結果をパーセンテージで示したのが図 10 ～図 12 である。

問 4 を除いてはどの年度についても「そう思う」「ややそう思う」の回答比重がどれも 9 割前後を占める結果となり、ほぼ同じように肯定的な評価を受けているとみなせるだろう。しかしながら、対面授業と比較してオンデマンド授業では説明の丁寧さと授業方法の工夫について強い肯定の回答割合が減少していることがわかる。教員による講義も資料として配信される今、この問題は教材の問題（問 5）にも関わってくるため、この点については §4.3 で取り上げる。

対面授業とオンデマンド授業で回答の傾向に大きな違いが見られた問 4 では授業内外で質問の機会があったかについて尋ねている。オンデマンドでは「あまりそう思わない」「そう思わない」への回答率がかなり高く、否定的評価が 5 割を超える結果となった（図 11、2020 年度：51.0％＝ 76 件、2021 年度：66.4％＝ 73 件）。そこで授業の改善点に関する自由記述（問 12）を見てみると、問 4 に関連するとみなせる回答は「質問する場を少し増やして欲しい」という 1 件のみであった。これはどういうことであろうか。1 つの推測として、オンデマンド授業ではリアルタイムでの質疑応答が望め

図 10　問 3.　教員の説明は丁寧だったか

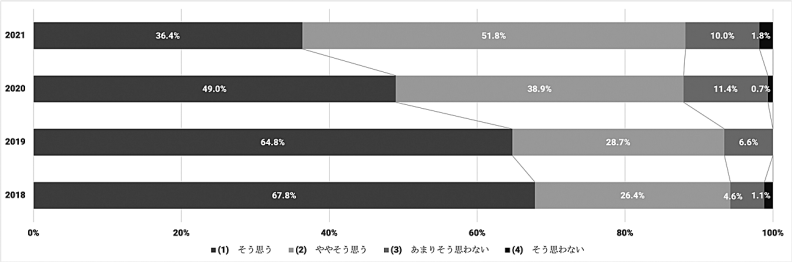


図 11　問 4.　教員は授業内外で質問機会を与えたか

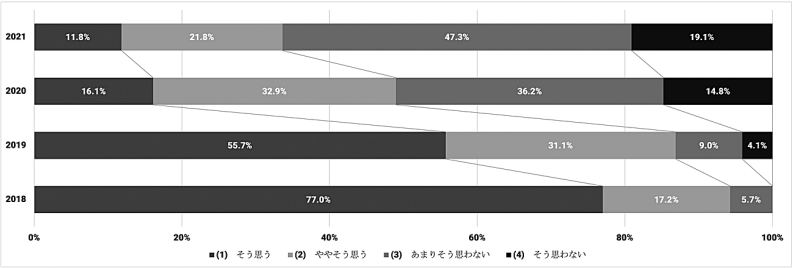
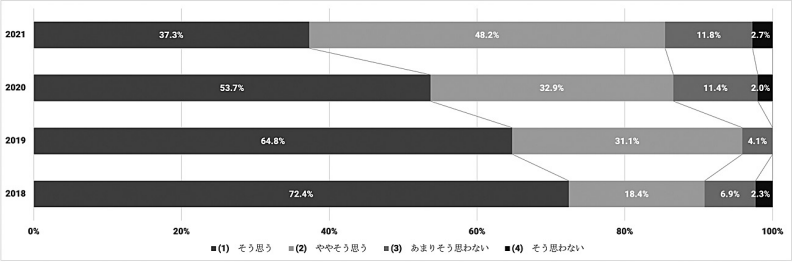


図 12　問 6.　教員は授業方法を工夫したか



ないことは自明であり（少なくとも本科目では Zoom などを使った同期型オンライン授業は行わないことを初回ガイダンスで周知していた）、同時に「授業の内外」という境界も曖昧になり、そうした環境で何を質問の機会として解釈するかについては定かではない。オンデマンド授業での回答結果はそうした事情をなぞる形になっているという可能性はないだろうか。そのような想定に立てば、この回答結果は必ずしも否定的な価値を帯びないことになる。

ところで、授業用プラットフォームの Classroom にはコメント機能があるが、これを利用する学生はいなかった。メールを用いてコーディネーターに数件の質問があったがどれも事務的な問い合わせに留まり、講義の内容に関することではなかった。いずれにしても、今後どのように学生の主体的な質問を促すのか、その質疑応答からさらなる議論に発展するような場をどのように確保するのかについて検討していかなければならない。実際に「質問に答える形式が取り入れられたことで授業に相互交流感生まれた」という報告がある（松嶋、2020: 19）。これは「主体的に関わることが知識を構成する」（近藤、2021: 107-108）ことにも結びつく問題である。

4.3.　授業内容

最後に、「授業内容」として分類した問 5 と問 7 の回答結果を、それぞれ図 13 と図 14 に示す。

まず問 5 については、すべての年度で高い肯定的評価を得ているということを確認した上で、§4.2 で取り上げた教員の説明の丁寧さと授業方法の工夫の問題と合わせて考えてみたい。

オンデマンド授業の 2 年間では対面授業と比較したとき、「教員の説明の丁寧さ」「授業方法の工夫」「教材の有用性」に関しては強い肯定の回答割合が減少していることがわかる（図 10、図 12、図 13 参照）。前節でも触れたように、こうした要素はすべて web 媒体で提供され、学生はオンデマンドでアクセスすることになる。ここで、授業の改善点を尋ねた問 12 の自由記述回答全体を見てみると、最も改善してほしい項目に「(1) 予習・課題」、「(2) 授業説明・授業方法」あるいは「(3) 教材」を回答した中に講義

図 13　問 5.　教材が授業内容の理解に役立った

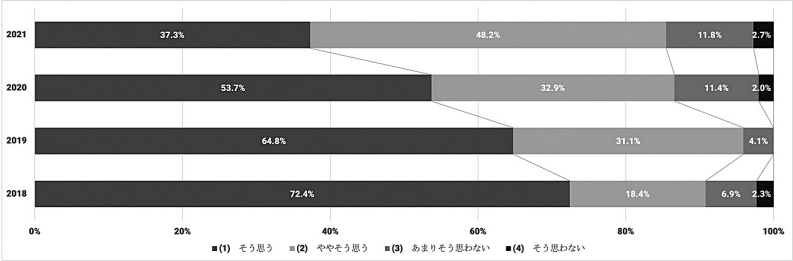
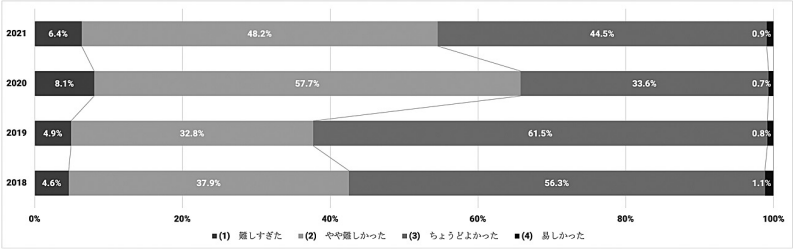


図 14　問 7.　授業の難易度・レベル



資料に関する意見が少なからず見られた（2020 年度：20 件中 7 件、2021 年度：12 件中 4 件）。具体的に挙げると、「［前略］、動画も長いため、もう少し講義動画を短くしてほしい」、「先生によってだいぶ授業の内容に差があった気がします」、「文献等の資料だけの場合よりも、 動画での説明があった方がとてもわかりやすかったように感じました」（以上、 2020 年度）、「教員によって、 内容や難易度、 配布資料の分かりやすさだったり、かなりばらつきがある」、「動画が見れないなどの不備が多くあったり、PDF のみなどのの［sic］授業は理解するのが大変だったので録画が基本なのであれば統一して欲しかった」（以上、2021 年度）といったものである。以上の記述回答から、 問題は主に講義資料の分量・難易度と資料の形式（動画か PDF か）にあるとまとめられるだろう。

対面では厳密に 90 分という授業時間が定められているのに対し、 オン

デマンドでは必ずしもそうではない。実際にいくつかの講義では、分割された 1 つ 1 つの動画ファイルの長さは 30 分程度でも合計で 1 時間を超えるものがあった。教室では時間の制約から、広範なテーマに対してごく簡潔な説明に終始してしまい、表層的なことしか伝えられず歯痒い思いをすることがあるが、オンデマンド配信では幾分かでもその問題を解消できる。それゆえに長い講義時間に繋がってしまうこともあるだろう。アンケート結果全体で見ればごくわずかとはいえ、改善を望む声に鑑み、配信する講義の分量自体を調整したり、視聴必須の講義と余裕のある場合に視聴する 2 次的資料というように分類して提供したり、さらには講義資料を動画形式に統一したりと、今後の改善に向けて検討していく余地があることが明らかになった。

また、こうした講義資料の分量が、結果的に問 7「授業の難易度・レベル」への回答に作用していることも考えられる。講義と学習の時間が長くなれば、それだけ所与の事象を詳しく扱えることになり、結果として難解度は上がるだろう。

さらに、「教員の説明の丁寧さ」「授業方法の工夫」に関しては、オムニバス形式であるがゆえに、「同じ授業」という考えの元に教員ごとのスタイルの違いが過度に目立ってしまい、それが評価への否定要因として作用することも懸念される。これらの違いは実際には肯定的にも否定的にも評価されうることは、上述のものとは対照的である次のような記述回答からもわかる：「各授業が違う先生で、授業の進め方がそれぞれで楽しかったから」（2020 年度）、「各先生の違う角度からの説明が聞けて面白かったからです」（2021 年度）。オムニバス形式で授業を進めるにあたり、オンデマンドでの講義資料の提示の仕方は重要な課題になってくるが、担当教員の個性的な側面を生かしてこの種の講義形式が持つ特性（多様性）を確保するためにも、各講義を無批判に平準化することは避けなければならないだろう。

5.　おわりに

以上でオムニバス講義における対面授業とオンデマンド授業との比較を

終える。本稿ではオンデマンド型の利点というよりも問題点の方が目立つ結果となったが、そもそも授業評価アンケートにおいては対面授業と同様にオンデマンド授業についても肯定的な評価の方が圧倒的に多いことを忘れてはならない[5)]。その上で考察をまとめると、対面授業からオンデマンド型オンライン授業に変わることで最も変化が観察された項目は、質問機会、講義資料の分量・難易度そして教材（講義資料の形式）の3つであると言える。これらの問題点を改善していくことで、オムニバス形式の講義であっても十分オンデマンド型授業として実施していくことができるだろう。

そのいっぽうで、今回のアンケート結果の比較からオンライン授業で損なわれてしまう要素、それは対面授業でなくては実現が難しい要素もあることも示唆された。少なくとも本科目について言えば、それは各講義を担当する教員が個々に持ち合わせる授業方法や説明の仕方、言い換えれば表現者としての個性的なパフォーマンスが十分に発揮されないか、学生に伝わる形では提示されない、ということである。

こうした教員の特性は教室での授業時に見られた学生とのダイナミックな相互のやり取り（質疑応答）においても発揮されるだろう。こうした側面をオンデマンド型授業の中で実現する鍵は、まさに質問の機会の確保にあると考えられる（§4.2）。少しでも「深い学び」につながり、学生が「主体的な参加者」となるような工夫を模索し続けなければならない（cf. 近藤、2021）。

注

1）　2020年度では中間と期末に「発展学習」と称してそれぞれ次のテーマについて学習報告となる小レポートを課した（分量はリアクションペーパーに準ずる）：（1）イベロアメリカ世界の国や地域が日本のメディアでどのように扱われているか、インターネットを駆使して調べ、自分なりに考察したことをレポートする、（2）13の講義テーマの内、自分が最も興味をもったテーマについて関連する文献を読み、より発展的なリアクションペーパーを書く。そして2021年度の期末には「自律学習」と称して上記の発展学習のテーマを1つにまとめる形で設問して小レポートを課した（ただし分量は800字以上と定めた）。

　両年度ともにこれらの課題については初回授業ガイダンスで周知し、学期を

通して自分なりの問題意識を持ちながら各講義を学ぶように促した。

2）　この授業評価アンケートは 2015 年度に紙媒体からウェブベースに移行し、原則全科目を対象に実施されることになった。2017 年度までのアンケートは問 1 ～ 10 の質問と自由記述欄の合わせて 11 項目という構成であったが、後に問 11 と問 12 が追加された（自由記述欄はそのまま）。なお、2019 年度以前のアンケート結果については前任者の髙木耕先生の了解の元、教務部の石津仁氏に便宜を図っていただいた。ここに記して両氏に深く感謝の意を表する。

3）　最後の選択肢「(6) 特にない」に対する回答は圧倒的多数だったため図中では省略した。その回答結果は、2018 年度：90.8％＝ 79 件、2019 年度：81.1％＝ 99 件、2020 年度：81.1％＝ 111 件、2021 年度：90.8％＝ 78 件であった。

4）　神田外語大学 HP 上の情報公表一覧 2-8：授業評価アンケート「学部　2015 年度前期～ 2020 年度後期授業評価アンケート集計結果」 https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/news/53438/https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/main/about/announcement/（2021 年 10 月 14 日閲覧）によると、大学全体の研究科目における授業時間外で費やした学習量については、2020 年度前期では「多かった」と回答する割合が前年度までと比べて大幅に増えているが、後期ではある程度減少している（40％台前半で推移→ 2020 年度前期：57％→同後期：49％）。おそらく、前期では慣れないオンライン授業に対して教員側では課題の量を多めにせざるをえなかったところ、後期では何かしらの授業改善が図られた結果であろう。学生側もオンライン授業に慣れて要領が分かり、課題処理能力の向上と心理的負担の軽減が回答数の減少につながっている可能性も考えられる。

5）　このことは自由記述回答におけるコメントの数とその内容からも確認できる。オンデマンド授業時の改善点（問 12）に関する記述回答が 2020 年度 20 件、2021 年度 12 件であったのに対して、問 13 の自由記述欄には 2020 年度 44 件、2021 年度 29 件のコメントが寄せられた。とくに問 13 については、対面授業時の場合と比較しても、これを大きく上回る数である（問 12：2018 年度 3 件、2019 年度 9 件；問 13：2018 年度 18 件、2019 年度 27 件）。そしてその大半が授業内容や授業を通しての学びを肯定的に評価するものや感謝の言葉であった。以下に問 13 の自由記述から比較的内容が多岐にわたるものを選んでそのごく一例を示す（引用中のスラッシュは改行を示すために筆者が付した）：「ありがとうございました。／ 3、4 年生から選択できる研究科目について何を学べば良いか悩んでいたので、今回の授業を受けて気になった分野について二年生で深く学び研究科目を選んでいきたいです。初めて講義を受ける先生ばかりで、個性豊かな先生がたくさんいらっしゃり、実際にもっと授業を受けてみたいと感じました」、「オンデマンド授業ですが、毎授業異なるテーマで楽しめました。また、この講義ではたくさんのことを学びました。初めて聞くことが多く、とても勉強になりました。また、リアクションペーパーを毎回書くことで文章力もつい

たように思います。楽しく、ためになる講義をありがとうございました！」「自身のイベロアメリカに対する意識、知識が格段に上がった気がしました、またスペイン語学科［sic］でブラジル語やブラジルの地域について知らないことが多かったので新しい発見となり、とても楽しかったです。授業形態もオンデマンド形式だったので時間のある時にできてよかったです」（以上、2020 年度）、「姉妹語のポルトガル語に興味を持ちました。また、先生が毎回違うことで、その先生のこと（授業の進行や研究内容、雰囲気など）を知ることができ、後期の履修登録や研究科目の選択につながると思いました」、「中国語専攻ですが、毎週、先生方が配信してくださるビデオが見やすく、イベロアメリカ地域に対する興味を持ちました。後期は関連した授業を履修したいです」（以上、2021 年度）。

オンライン授業でもこのように魅力的な授業を展開し、科目の内容充実に尽力された担当教員各位に、この場を借りて謝意を表したい。

参考文献

青砥清一（2018）「神田外語大学のスペイン語教育について」『言語メディア教育研究センター年報』（2018 年度）、81-96 頁

植村八潮・山崎航・小田佳織・長谷川さくら（2020）「教員・学生へのアンケートによるオンライン授業の現状分析」『専修大学情報科学研究所所報』96 号、21-30 頁

大久保和宣（2021）「LMS を積極的に活用したオンデマンド授業：動機づけと学習意欲の向上を目指して」『2021 年度　ICT 利用による教育改善研究発表会　資料集』公益財団法人私立大学情報教育協会、令和 3 年 8 月 25 日、14-17 頁

近藤有美（2021）「構成主義の学習理論に基づく大学オンライン授業の試み」『名古屋外国語大学論集』8 号、105-130 頁

松嶋祐子（2020）「Google Classroom を活用したオンデマンド型授業の実践」『専修大学情報科学研究所所報』96 号、17-20 頁

山本恵・若山公威・眞鍋和弘・宮本真有（2021）「オンライン授業実施状況の調査と分析」『名古屋外国語大学論集』8 号、1-75 頁